

インド更紗の伝統と現在

日本女子大学名誉教授

小笠原小枝

【インド更紗の名称】：「インド更紗」という呼称は日本でインドの模様染、特に木綿の生地に模様を表したものを総称したものですから、この名に当たるインドでの名称はありません。しかし様々ある技法のなかで、最も一般に知られているものが、カラムというペンを用いて描くカラムカリ (kalamkari) と木型を使ったブロック・プリント (wooden block printing)、あるいはこの二つの技法を併せ持ったものです。

【インド更紗の歴史】：中国が絹織物において世界で最も長い歴史を持つように、インドは木綿の模様染においてその名を世界に知られてきました。実際、茜の染文をあしらった縞模様の綿布がシリア・パルミユラから発見されているように、インドの染は紀元まもなくの頃から国外に輸出されていたことが知られています。

輸出反物としてインド更紗が最もその本領を発揮したのがヨーロッパの大航海時代 16～17 世紀以降の頃からです。特に 17 世紀に入ってヨーロッパ諸国の東インド会社が相次いで設立されたことにより、インド更紗は洋の東西に運ばれ、それぞれの国の模様染に大きな影響を与えてきました。日本近世の多彩な友禅染の発達、ヨーロッパ近代の模様染の発達、どれもインド更紗を抜きにしては語れないものです。

こうした歴史を持つインド更紗が、未だに無形文化遺産にノミネートされないのは何故か。それがこのインド更紗の現状調査を始めた大きな動機となっています。

【調査の概要】：2011 年度は木型の製作地ペタプール、型更紗の製作地サンガネール、バグルーなどインド西北部の木型の製作工程、あるいは型染の製作工程を調査してきました。2012 年度はインド南部のカラムカリの製作地スリ・カラハスティ、型と手描きの製作地マチリパトナム周辺を調査地に選び、それぞれの地の工房でどのような原材料が使われ、どのような工程で製作されているのか、どれだけの人たちが伝統技術の継承に携わっているのかなどを記録しました。しかし、その製作技法がいつからその土地に根ざしているかという点になると意外に難しい。つまり日本人のように人種の異なる為政者を持ったことのない私たちには理解を超える問題がその背景に横たわっています。結局スリ・カラハスティで得られた情報は 1950 年代以降、つまりインド独立後に政府の指導もあって再興されたということでした。再興された製作工程は概ね 18 世紀前半にヨーロッパ人の手によって記された技法書が手本とされています。

【伝統技法と現在】：歴史書や現存資料から、インド更紗における染色技法の大きな特徴とみなされた技法は、「蠟」による防染技法と「媒染剤」を塗布した後に染料につけて発色させる「媒染模様染め」でした。しかし現在の更紗製作に後者の技法は残っていますが、「蠟」は姿を消してしまっているようです。また染色前の「布の下ごしらえ」、染色後「布の晒し」といった工程も相当に省略されています。その大きな要因は染料の変化、つまり植物染料から化学染料に替わったことで「塗り染」が容易になったことの一語に尽きるでしょう。かつてインド更紗が囑望された色染めの堅牢さと鮮やかさが、どの国でも染色可能となった今日、伝統工芸としての染めに求められているのは、彼らの物語や神々を、あるいは花々を自らの手で描き・型を置くことが大切であり、その手仕事を伝統の継承とみるのでしよう。